

令和4年度 青梅市立吹上中学校 学校評価シート

〈学校経営方針の重点〉

- 1 確かな学力の向上 (知)
- 2 豊かな心の育成 (徳)
- 3 健やかな体の育成 (体)
- 4 地域に根ざした学校づくりの推進

※評価 A(高度に達成) B(おおむね達成) C(達成するにはもう一歩) D(ほとんど未達成)

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
学力の向上	基礎的な・学習の充実 きめ細かい指導内容を定着と		生徒のよい点や可能性を見付け、伸ばす指導の工夫を行う。	B	個々の生徒への対応を十分に行うことができた。また情報端末の導入により、課題の提示や記録の把握をしやすくなり、指導に生かすことができた。今後は、教員間でもっと生徒の情報共有を増やしていく必要がある。	2年目を迎えるICT活用に関する研修を深め、新学習指導要領の理念に基づき、個に応じた指導を深める必要がある。	A	個々の生徒への対応を充分に行ったと考える。家庭と協力して、ICTを活用した学習が深化していくことを期待する。生徒の情報共有を深める時間を確保できるように改善を図ってほしい。「どちらかという～」の評価の分析が必要である。	保護者アンケートの「興味関心を引き出す工夫」「一人一人が活躍する場の設定」の否定的評価が15%あることが指摘された。さらに保護者・生徒の声を真摯に受け止め、授業改善等に努めていく。
			めあて、課題、まとめ、振り返りを適切に設定した授業を行い、生徒の主体的な学びを促す。	B	めあてを示し、課題設定、思考、まとめの流れを設定することで、生徒が学習に向かう姿勢を強めることができた。	さらに、自ら課題を設定したり、多面的・多角的な思考を身に付けさせることで、より主体的な学びにつなげたい。	A	保護者の肯定的評価が92%を占めている。課題設定能力、多面的多角的な能力を身に付けさせるための一層の工夫を期待する。	さらに授業改善を進める。指導計画を丁寧に練り、学びがよいのある課題設定を行い、生徒の主体的な学びを育成する。
			生徒が自分の考えを表現したり、他と比べたりしながら、自分の考えを再構築する場面を設定する。	B	各授業内で一人一台端末を使用し、自分の意見を発表したり、他の意見を共有する等して、自分の考えを再構築する場面を作り出した。	授業内だけでなく、学年内、学校内での発表活動を増やしていく。	A	様々な考え方に接することは大切なこと。生徒アンケートでは、肯定的評価が85%と多いが、否定的評価にも対応が必要。	端末利用だけでなく、ブックトークや新聞記事に対する自分の考えをまとめる等、文字を書いたり、対面で表現をしたりする場面も取り入れているので、今後も継続する。表現することに苦手意識のある生徒への対応をさらに丁寧に行う。
			基礎的・基本的内容を繰り返し行い、粘り強く学習する力を育てるために、一人一台の端末を活用し、主体的に家庭学習を行う意欲を育む。	B	家庭学習については生徒によって差がある。端末を使用し、持ち帰られるようになって、より充実した活動を行うことができていない生徒もいる。しかし、タブレットの使用が苦手な生徒もいるため、さらに活用を進める必要がある。	端末の有効な使い方、正しい使い方を継続して指導していく。授業中および家庭学習への活用では、適切な場面では使えるように指導していく。また、インターネット使用についてのルールやマナーなども指導する必要がある。	B	「ICT機器使用ルールが守れている」に93%が肯定的評価をしている。一方、「ICT機器を活用して学習を深めている」は、16%が否定的評価である。なぜ、端末活用が必要なのかを十分に理解させる必要がある。	家庭で粘り強く学習する習慣を身に付けることは喫緊の課題である。保護者と一緒に学力向上について考える場を設け、学校・家庭が一体となって取り組んでいく必要がある。また、クラウド型学習教材を継続して活用し、家庭学習の充実を図る。
豊かな心	生徒の社会性を尊重し、人権教育を推進し、思いやり、認め合い、支え合う指導を充実させる。	いのちを大切にすることを心の教育を推進し、いじめの根絶を目指して、思いやり、認め合い、支え合う指導を充実させる。	道徳科の指導に工夫をしたり、現在の課題について広い視野からの報道等を活用したりすることで、こころの教育を充実させる。	B	道徳授業地区公開講座では「命の尊さ」というテーマで授業を行い、その後の講演ではLGBTQの方から「多様な性のあり方」を学ぶことができた。道徳の授業では、各学年で自分を知ることや他人への思いやり、将来のことなど多岐にわたったテーマで授業を行い、自己肯定感を高めた。	コロナ感染防止策を取りながら、話し合い活動を少しずつ行うことができた。自分の意見と仲間の意見を比べながら、お互いを認め合う指導の充実をこれからも継続する。「命の尊さ」を道徳の授業だけでなく、教育活動全体を通して、指導していく。	A	「自分にはよいところがある。」に生徒の肯定的評価が83%であることは大変うれしい。家庭でも子供とよく話し合い、道徳性を育てていきたい。「多様な性の在り方」についての講演会は、現在の重要な教育課題であり、真面目から取り組んだ先生方に敬意を表す。	担任のみではなく、全ての教員が道徳科の授業を行えるように整えることができた。講演会等の内容を精査し、多様な考えに触れる機会を意図的に設定したことで、生徒の心に響く取組になったと考える。さらに、読書の習慣をより一層推進していき、心の教育の充実を図る。
			学校いじめ防止基本法に則り、いじめアンケートを活用し、いじめの未然防止・早期発見・解決を図る。	B	いじめアンケートを年4回実施したが、些細なことでも担任を中心に学年全体で迅速に対応できた。また、生徒の情報を会議などで全教職員が共有できた。小学校と連携して、いじめゼロへの取組を行った。	アンケートからわかった事実には学校いじめ防止基本法に沿って、迅速に対応し、学校全体での情報共有を行う。また、週1回のいじめ対策委員会で生徒情報を共有し、いじめの未然防止・早期発見・解決を引き続き行う。生徒が教員にいつでも相談できる関係を普段から築くためにも生徒とのコミュニケーションを常に取っていく。	A	「いじめゼロ」に向けてあらゆる手段で対応してほしい。アンケートの活用は、生徒間の問題把握に有効だと考える。学校は勉強のみではなく、人間形成の大切な場である。どんな小さないじめも見逃すことなく、常に先生方が見守っていることを生徒に伝えてほしい。	いじめの早期発見、早期対応ができるように、週一回のいじめ対策委員会において情報交換をさらに徹底する。教員による休み時間の見守りや生徒同士のトラブルを未然に防ぐ取組を継続する。いじめと認知しない事実でも、見守りを続け、軽微な変化も見逃さない雰囲気をつくる未然防止のために、いじめを許さない心と態度を育成する。
			規範意識の醸成、あいさつの励行、礼儀作法の徹底を図り、生徒の社会性を育む。	B	学校生活において全体的には挨拶をしっかりと行っている。また12月に実施した生活アンケートによると、「進んで挨拶をすることができている」と回答した生徒は93%だった。まだ自分から挨拶をしたり、大きな声で挨拶をすることができない生徒も少なからずいる。	年度当初に「挨拶5カ条」を実践していくという方針が生徒会から出されたが、定期的にその方針を再確認させる呼びかけを行い、さらに挨拶のできる生徒を育成する。また、日頃から礼儀作法を担任や授業担当者が指導していくことも必要である。	A	通学時に吹上中は、学校の中でももちろんだが、学校外でも、とても気持ちの良い挨拶をしてくれる。地域住民からも評判が良い。スローガンを忘れるぐらいに、自然体で行動できるくらい努力してほしい。	生徒が「あいさつ」について考え、全校生徒にアンケートを取り、意見を聴いたり、傾向を観察したりしながら、自分たちの力で笑顔とあいさつの溢れる吹上中をつくらうと取り組んだことが成果として現れてきている。生徒の主体的な活動をさらに推進し生徒の社会性を育む。
			新型コロナウイルス流行に影響された恐怖を受け止め、正しく予防をさせることで、思いやり、支え合う心を育む。	B	学校より、保健よりなどで正しい情報と知識を生徒に伝えることで、生徒の不安を取り除き、過剰な恐怖を持たないように指導することができている。消毒や換気などの対策を行い、生徒の感染防止に努めている。	引き続き、感染予防を行いながら、生徒の教育活動を充実させていく。来年度から始まるマスクの着脱など新しい生活様式の中で、生徒が正しい知識をもち、お互いが思いやり、支え合い差別なく生活できるようにしていく。	A	学校も生徒も十分に感染防止に努め、安心安全な環境づくりをしていることがうかがわれる。さらに、生徒が正しい知識による正しい行動ができるようになってほしい。	コロナ禍を経て、お互いを思いやり、支え合う心が育ったと感じる。今後も、思いやりと支え合う心を育成する取組を継続する。
健やかな体	心身ともに健康でたくましい生徒の育成	心体の健康を増進させるとともに、生徒の居場所づくり、きずなづくりを推進し、不登校の未然防止を図る。	新型コロナウイルス感染防止対策を適切に行うことで、自分と他人の健康を守る態度を養う。	B	朝の健康観察・マスク着用・手指消毒を年間を通して徹底させた。ただし、「思いやりの距離」を守ることができなかった生徒がアンケートによると、25%もいることが課題である。	コロナ感染防止対策を日頃から呼びかけていることで、基本的なことは守られている。ただし、「思いやりの距離」を守ることが徹底されていないこともあるので、再度年度当初に生徒に指導していく。	B	「思いやりの距離」により「お互いの心の距離」ができてしまうジレンマがあるが、学校は適切に感染症対策を講じていると思う。	来年度からは、コロナ禍以前の体制に戻していくが、生徒と教職員が心を通わせ、協力して、自分と他人の健康を守る態度を養う教育を継続する。
			生徒に寄り添う指導を継続しながら外部機関と連携をし、不登校生徒と家庭の支援を組織的に行う。	B	生徒指導の際に迅速に対応したことが多かったが、教員内での情報共有が不足していることがあった。朝の打ち合わせや会議などで情報共有をもっと行ったほうがよい。不登校生徒も含めて、何かあったときには、家庭への電話連絡や家庭訪問を適宜行い、保護者と連携を図る。また、登校支援室、特別支援教室、市の教育相談も有効的に活用できた。	生徒指導の際に情報共有を朝の打ち合わせや会議などで引き続き行っていく。また、トラブルの内容によっては随時に教員を集めて情報共有をすることも徹底する。不登校の生徒を含めて、気になる生徒がいる場合には、電話連絡や家庭訪問を継続して行うとともに、関係機関とも連携していく。	A	適切に指導していると感じる。生徒の中には悩んでいる子もいると思う。引き続き、丁寧な見守りをお願いしたい。今後も連携は常に保ってほしい。	引き続き学校と家庭との連携を密にとっていくように工夫をしていく。ICTの活用により、生徒に課題等が学校から定期的に伝わるのが可能になった。また、ふれあい教室やサポート校で居場所をつくった生徒もいる。外部機関との連携をさらに深め、不登校生徒と家族の支援を継続する。
			生徒会活動等の生徒の主体的な活動や行事等を通して、生徒の居場所づくり、きずなづくりを推進する。	B	生徒会を中心に球技大会や3年生を送る会を主催したり、生徒会や生活委員会と連携して、挨拶運動に取り組み、生徒の居場所づくりを推進している。生徒の悩み等には担任を中心に学年で対応し、安心できる学校生活を送らせるようにしている。	生徒会が中心となって、行事などの運営を行わせるとともに、学年でも生徒の主体的な活動を促すために班長会などを開催する。	A	生徒の主体性を伸ばし、生徒による主体的な活動を推進してほしい。生徒と先生方が常にコミュニケーションをとっていきけるような良好な関係を保ち続けてほしい。	生徒が主体的に考え、体育大会や芸術発表会、球技大会、3年生を送る会等の活動を行うことができた。また、ICT機器を活用することで、生徒が全校生徒の意見を集約することができ、生徒の主体的な活動が活発になっている。さらに生徒の居場所づくり、きずなづくりを推進する。
地域に根ざす学校	地域から信頼される学校を推進	学校公開や学校より・学級より・HP等で教育活動の様子を積極的に公開し、地域の関心を高める。	B	本校の様子をHPのブログを活用し、公開することが不十分であった。月1回発行の学校だよりだけでなく、学年だよりも定期的に発行できるとよかった。修学旅行での活動の様子をブログにアップしたのは保護者から好評であった。	HPのブログを活用し、生徒の学校生活を公開していく。また、引き続き学校だよりや学年だよりを活用し、「地域の中の学校づくり」を推進していく。	A	吹上中だよりやHPでは常に正確で、内容の分かりやすい、スピーディーな情報提供をしている。修学旅行のリアルタイム配信は子供の様子が身近に感じられとても良かった。継続を希望する。	コロナ禍ではあったが、行事等を概ね行うことができ、保護者には公開することができた。来年度は地域の方々にもご覧いただけるように環境を整える。今後もHPや学校だより、オンライン等で広報の充実を図る。	
		地域とともに、安心安全な学校づくりを推進するために、学校の新型コロナウイルス感染症対策を地域に周知し協力や応援とともに、交通安全教室や青学塾、金融教育等、地域人材を活用して、特色ある教育活動を推進する。	B	安全安心な学校づくりを推進するために保護者・地域にコロナ感染防止対策を文書で周知した。また、自転車安全教室、金融授業、落ち葉掃き清掃などを通して、地域人材を活用し地域に根ざした教育活動を行った。	今年度はコロナ感染防止対策を徹底しながら、地域の方と連携した行事を行うことができたので、引き続き、地域人材を活用し、安心安全で特色ある学校づくりを推進していく。	A	吹上中の豊かな環境の中、落ち葉掃きを一緒にいけると楽しかった。行事を通して、地域との交流が図られていて素晴らしいと感じる。今後も継続してほしい。学校が目指している教育が保護者・地域によく伝わっていることが吹上中の大きな特徴だと思う。	新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底し、学級閉鎖等の感染拡大はなかった。新年度からのアフターコロナ禍でも、生徒が安心して生活できるように、丁寧な指導を行う。	
その他重点	特別支援教育の推進	生徒一人一人の特性を理解した指導を行う。	B	生活指導部の教育相談委員会が定期的に行われ、生徒についての情報共有を行うことができた。また、職員会議や運営会議等で生徒情報の共有を図ることができた。特別支援教室の指導教員とも連携を図ることができ、課題解決につなげることができた。	引き続き実施することに加え、教育相談に関する研修等も検討する。また、Classroomを活用して、生活指導情報を全教員で共有できるシステムづくりを進めていく。	B	生徒理解は基本である。取組の継続をお願いする。特別支援学級の生徒を含んだ全校が一体になり活躍の場を設定していることに感謝している。今後も生徒一人一人に寄り添った指導をお願いしたい。	来年度も週一回の相談部会、月一回の校内委員会を確実に行うとともに、記録の共有をしながら、生徒の情報収集と、対応の検討、実践をする。SCによる面談や、「SOSの出し方」の特別授業などSCとの連携により、生徒の心の成長につながるよう、指導体制を整えていく。	
		校務改善を図り、生徒と向き合う時間を確保し、教員のワークバランスを整える。	B	教員がSSSの支援員を活用することで、勤務時間削減につなげ、働き方改革を推進できた。定時退勤推奨日には、管理職から声をかけ、在校時間を短くする教員が増えた。朝の健康観察をはじめとして、Chrome bookを活用することで働き方改革につなげることができた。	SSSのおかげで、教員の働き方改革が進んでいる。また、定時退勤をする教員が増えてきて、時間外労働時間が減ってきた。来年度もSSSやChrome bookを活用して、働き方改革を推進する。	B	早朝より出勤している先生方を見かけ。改革が大変だろうが、働き方を見直す必要がある。削れるものと削れない物の検討を行い、勤務時間の削減に努力をしてほしい。	校務改善を図るために、業務内容の見直しを再度行う。教員間の連絡や配布文書は校務支援システムの掲示板機能等を活用し、ペーパーレス化を進めていく。今後もSSS等を積極的に活用して勤務時間外の労働時間を減少させる。	